



慶應四年
内外新聞
三二一

特別
48
267



閏四月十七日

內外新聞

第一



第七日

每出板

知新館

門 4.8
號 267
卷

神戸新聞

西四月廿八日
我四月廿八日
出

○第五月十八日

當地ニ出来セシ堀切ノ不行届ヲ證ス可シ
近頃美麗ニ造營シタル米國コンシユル名役
館ノ前面ニアル砂濱ハ斯ノ大雨ノ水害ヲ
醸セリ曩ニ工人堀切ヲ營シ時勞煩ヲテキ
シトル名社中ノ居館ハ尤モ此水害ヲ受タ
リ軒下并ニ商店ヘノ通行ホ暴流ノ為ニ大
ニ害セラレタリ是日本人ノ建築ノ術ニ疎

昭和二十八年
六月九日
購求

キカ故也

○大坂ヨリノ報告ニ云

大日本 皇帝ハ未タ大坂ニ滞在ナリ供奉ノ
面々モ多人數輻湊シテ大体市中ニ充滿ス
ルカ故ニ如何ナル小家ト雖借料等非常ニ
貴騰セリ茲ニ於テ考フレハ大坂ニ開港セ
ント欲スル人ハ斯ノ如キ借賃ホノ高價ヨ
シテ畢竟盛ニ行レシ商法モ漸々衰微ニ
傾クノ不幸ニ遇セン

○第五月十七日 我四月朝サラミス船ト云フ

蒸氣船ハ船ニ英國公使ハルリーハークス
人ノ旗章ヲ揚ケテ入港セリ時ニラセーシ
名船ヨリ定例ノ祝砲ヲ發セリ斯テ暫時ノ後
サラミス船ハ大坂ニ出帆シ再ヒ翌日夕ニ
至テ歸着セリ

○同日夕ロト子一船副將ケツヘル人ノ旗章
ヲ揚テ入港セリ時ニ米國戰艦コルヘツト
オナイタ名船ヨリ祝砲ヲ發セリ

○翌十八日我四月廿六日朝ゼブラ船ハ英國公使ハ
ルリーパークス名ノ護衛トシテ兵士卒數
名ト海軍士卒ヲ乗セテ大坂へ發セリ

○同日ロツト子一オセーニ艦モ亦大坂
へ赴ケリ時ニ天保山ノ砲臺ダイバ并ニ米利堅艦
コルヘツトヨリ祝砲ヲ發セリ

○同日夕ヘルマン名船二百五十人ノ婦人小兒
ヲ乗セテ江戸ヨリ來着シ報告ヲ陸ニ通ル
ヤ直子ニ豊後洋ニ向テ發セリ此報告ニ依

テ左ノ新聞ヲ得タリ

○會津并其外等凡テ廿万五千ノ兵ヲ率テ江
戸へ向テ發セリ一橋徳川氏也ノ海軍モ亦海軍
奉行某等七隻ノ軍艦ニ將トシテ會津兵ノ
應援ヲセンカ為メ昼夜蒸氣ヲ燃シテ江戸
海ニ在リ當時江戸城ハ已ニ
皇帝ノ所領ニ属セリ且ツ碇泊スル船ハ江戸
在ル女人童子ヲ他所へ運漕スルノ用意ヲ
ナセリ

論者曰是全ク空シキ風説ニシテ信スルニ足ラス
暫ク千五百人ノ兵アリト聞クニ今二十万五千
人ノ兵有リトハ虚説ノ甚シキ者歟

○十八日朝我四月廿六日横濱へ發セント用意セシ
バルクオレークス名船ハ延期バシ翌日我廿七日出
帆セシ時未タ港口ヲ出サルニ不幸ニシテ
洲ニ乗セタリ時ニ在港ノオセーシ船ヨリ
速ニ挽舟ヲ出シタレ凡東風殊ニ甚シクシ

テ挽ヒク丁能ハス又ストーンチ船ヨリモ挽
舟出シタレ凡亦能ハス後漸クシテアリ満汐ノ
時ニ當リテコツクチマヘルト云小軍艦ヲ
以テ挽出タセリオレークス船ハ敢モ損害
ナクシテ横濱へ出帆セリ

○香港ホクコンニ在ル英國名地コンシユル名役メトホル
スト名人ハ上海ノコンシユル名役医官ウインチ
エストル名人ノ後役ニ任セラレ又ストホル
ストノ後役ハシジョン名マルクハム名人へ命セ

ラレシヲ聞ケリ

○本月十六日我四月廿四日ノ後ハ物價相場ノ報告

ヲ得ス然レ子カ川木綿糸并ニサハイ服連ハ他
日價ノ上騰スルヲ待居ルトテ殊ニサワイ
ハ甚タ下直ニシテ買込タル人困却ノ風聞
アリ

○津出シ品物ノ中茶ハ殊ノ外好ミ手多シ然
シ仕来リシ出港物ハ多生糸煙草ナリトゾ
或人ノ書狀

来意ノ趣ニ夏中小艇競駈ノ企コレ有ト實

ニ開鬻ノ一トモ相ナリ或ハ適然タラン然

リト雖社中人少加之小艇モ亦些少ニ属ス

或ハ不可ナランカ余以為ク時々砲發ノ會

ヲ催シテ此ニ換ヘハ如何ン費用モ甚少ク

シテ木の糊紙等モ又聊備ハレリ且ツ地形

ヲ撰ミ東方ノ海濱ヲ以テ之ニ充ツ可シ發

砲期日ノ如キ每十四日ニ一度ツ、ニテ可

ナラン又費用ヲ減省スルカ為ニ一箇ノ粗

的ヲ用ヒシ此拳ハ實ニ社中而已ナラス恐
クハ看^{ミル}宦^{ヒト}モ亦愉快ヲ極ルニ至ラン

近日入港出港船日記

入港ノ分

○第五月十七日サラミス横濱ヨリ着 同日

ロテ子一全取ヨリ十八日ヘルマン江戸ヨ
リ

出港ノ分

○第五月十七日ウレツト上海へ出帆 十八

日ヘルマン備後洋へ全日オライクス横濱

同日ウエルケン長崎へ

兵庫大坂ノ通船

○ストンチ^{船名}ナル蒸氣船日々朝八字ニ^{我五}ツ

神戸ヨリ大坂へ出帆シ午後五字ニ^{我七}ツ

大坂ヨリ亦神戸ニ發ス荷物旅人等運輸ス

可シ

以上

支那國

此歲ノ初メ二月頃ヨリ唐國北京地名ト云
フ如ニ叛逆人アリシトソ其ユヘンヲ尋
ヌルニ元キリシタン宗門ノ徒起ツテ
王命ヲ用イズ妄リニ逆意ヲ企ツルカ
故ニ天子ヨリ或ル大將ニ命シテ之レヲ
伐タシムトイヘ凡徒黨ノ内ニ外国人四
五人モ交リ助クルト云フ然ルニレイ各ト
云フ大將イデハヨリ克ク之レヲ平ラ

ゲレカドモ残兵別レテ帝ヘノ糧道ヲ絶テ
專ラ海賊ヲナスノ故北京地名之レカタメ
ニ大イニ擾騷スト云フ

集者曰ク舊幕府政權ヲ採ル之
時ニ當ツテ肥前ノ国島原ノ村落
或ルハ長崎ヨリニ里斗リ離レシ
処ロニ浦上ト名附クル村アリ凡
ニ三千家モ有リト云フ如クトハキ
リシタン宗門ニ組セシモノ凡ソ合

ゼテ二千入モ有リシト聞ク夫レニヨツ
テ去年五月コロ尽ク召捕リニナリシ
カドモ如何ナル故カ之レヲ釋ルシ
今ニマダ盛ンナリト我カ宗門ニ依ス
ル者ハ皆之レヲ救フノ理ナル故佛人ヨ
リ助ケヲ乞イト云フ然ルニ当節ニ至
リ何ニカ御所置ノタメニ殊ニ御役人
方ノ御配慮トソ實ニ此ノ宗門斗リ
ハ恐レトナリ

兵庫新聞

慶應四年歲壬四月三日 標州兵庫

楠公廟前高札之寫

大政更始之折柄表忠之成典彼為 行天
下之忠臣孝子を 勅獎彼 楠公を 楠公
正之位中將正成精忠節義其功烈萬世輝
真二千歳之一人臣子之龜鑑之故今般
神号城退謹シ社壇造営此 楠公を 依
之金千兩 御等附在の 在事

他正行以下一統之者等鞠躬尽力共切方
不少服也賞也 授命 祀可有之也
仰 命 事

右之通也 仰者能及天下有志之者皆得
所為也 在知公同志類之向志可下年もの之

辰至四月

兵庫 裁判所

詳者曰

上心以古への志は孝子ヲ愛恤推言子実落後

しより難有るもあり昔人走ふれり近
甲名海より故善五條と道城正殿一と名
相勵玉座をとりと集者後を傳へて云

○五穀大旱ナキも能ハス人間病者も能ハス力
故今て疫所一新之お柄末夕天下平定トモ云レオ
ル中ニモ只諸民ヲ助ケテ一ヨ第一三思ハコトヨ
リレテ可疫拵列神戶ニナレテ病院所立
と後^{ア子}遍多萬氏ノ病ヲ平癒オセト名臣ヲ集メ
玉子一実之能有るトモナリ去ニヨツテ如何ナレ

早賊者ニモ病来ト有レハ速ニ為テ療治ヲ願フニ
ト云 事ナリ

可為院所ニ立方ニ然レハ莫クシテ入用ナク天
下有志ノ人ニハ所寄附ハ云々ニお來ルル共
為レ志天ケ出セトノ所ニ於テ後七ノ月第
二冊出ルル節ニある記ナリ

關東新聞

日及東海平定イタセシ故鎮撫惣督トシテ
近レニ條大納言様所 出逢ニ相来ト云

戦争風俗

四月十五日俄兵共町所宇都宮ニ據ルシタ是日城兵
防ク一アタワス其夜已ニ為城セリコノ事正一日朝
友軍人告来リシ故ニ直ニ官軍少探出シニ来リ
小山ト申驛ニヨイテ我ヒ催ス所城放小ニテ
宇都宮城ニ引退キ翌日ニ宇都宮ニ親友軍
大勝利アリシ者夜俄兵城中ニ地雷火ヲ伏セテ
逃ル其夜官軍ヨリ城ヲ包圍シ入城ニ及リ此處
火警ニテ宇都宮中甚ク大ケルニ怪亦ホモ

方之由是古方 知城兵口先山之申ストイヘヒコニモ軍
スル一可ワスニテ 終ニ會城ハ迹跡ル

一信物跡ハ進ミシ城兵截後高田道ニテ松代へ進ム
一ヲ上田松平ヨリ加勢トシテ幸人宛持出ス松代ヨ
松平ハ道跡モ遠カニ馳ル、一ニテ火急ニ人致ヲ
標出ス一多クハ六ヶ敷キ甚ナルニ今幸人兵出サレシ
一左モ有ルヘシト礼謝シテ市加勢ニ及バズ方ヲ以テ
返ス次ニ上田ハ近國ノ一ナカラ僅カ 幸人兵ヲ出ス
ト云フ一ハ只云伏ノ加勢ニシテ夕ノムニ足ラス紙ト共

ニ討スルベシト令ヲ下スカ右高田勢驚愕平伏シテ
本國へ使者ヲ馳シ重テ二百幸人ノ援兵ヲ加
ヘテ以テ城ヲ救ニ挫シキ城遂方ヲ久ヒ敗走
スル知ヲ度ヨリ高田勢追討シテ殊ニ勝利ア
リシトワ依之コレヲモ皆ナ會城へ迹ケ竹籠ナシ
洋ニ曰ク高田勢先ニ一サヘモセス我カ城下ヲ
甚修ニ通シ今城ノ近ルニ及ニテ其兵逐討シ
事甚意怪ク士道ニ馳ラツトノ風守

依之信越乃ヒ冥東八平穩ノ由風守ナリト度

鐵甲ノ中 御中 子 柄ト云ヘキ者ハ松代勇ト云フ
ナリ上田勇一ノ云フ杯ニテハ突ク強國ト云ヘシ

元新選組

近藤勇事

大和

右ハ先月武州ニヨイテ召捕ラレシ九條之内 隆茂
ト来リ白スニヨイテ左ノ如ク不置ニ其レト

近藤勇事

大和

此者又究悪ク罪有之如甲州 猪俣 武州 藤山
ニヨイテ友軍一隊對々余大逆ニ有之令前ニ求
モノク

至四月日

右ノ前級ニ藤川原ニおありて 深有之

西園寺ニ依中將公ニ丹 能 梅 津 徳 誓 ノ 師 供
大江山ニ有之 白雲ニ有之 大江山ニ有之

あつては強わらざる人々

園田忠年 志

甲州徳治の城の形を
見よ

奥平昌昌 是

志ぬ故のすゝめ

良資

伏水より織田を討つ時

宇治川の橋を断つ時
長肥

了は思ふに打つて

辰三月

於彼府總裁有栖川宮様へ英國公使お福

に書付及之付方と公使参殿途中云亦

く急遣致方有之相忠由所届達有之

及之付立後より建言

僅る事の上及南城所陣陣定り御廟築

り兵亦其の義と有存り得兵給り更引

相成り多自死し既来りお張以度之

及之付甲之陣進軍し裁會有存りお

追補 朝神 戸三 一 珠 事 出 来 せ り 神 戸 住 居 之
 七十 挽 以 切 付 金 子 渡 外 七 日 挽 或 八
 木 斧 二 働 見 終 二 金 子 渡 外 七 日 挽 或 八
 急 二 働 見 終 二 金 子 渡 外 七 日 挽 或 八
 右 二 働 見 終 二 金 子 渡 外 七 日 挽 或 八
 シ 二 働 見 終 二 金 子 渡 外 七 日 挽 或 八
 へ 二 働 見 終 二 金 子 渡 外 七 日 挽 或 八
 ノ 二 働 見 終 二 金 子 渡 外 七 日 挽 或 八
 今 二 働 見 終 二 金 子 渡 外 七 日 挽 或 八
 評 二 働 見 終 二 金 子 渡 外 七 日 挽 或 八
 本 二 働 見 終 二 金 子 渡 外 七 日 挽 或 八
 ノ 二 働 見 終 二 金 子 渡 外 七 日 挽 或 八
 二 至 者 乎 悪 一 終 口 ザ 云 日 茲 場

知新 鼓告文
 以我軍も社伴と結ひ日本府國此
 海邊ハ支那よりすゆてきこしんハ海
 岸のよと免世の人く一老らせんた免なり
 こけとささひはもそ一免もてころハのそを
 一はのそ一ゆ州移のま、知板せし
 けのちよりハいらつふそもてそゆと
 ともよみ免をせんそと社伴 一口の節
 志しめん云し



閏四月廿四日

內外新聞

第二

第七日 每二出版 知新館

神戸新聞 第五月廿三日

英國ス子ラー名船ノ著シテ支那國ニ在ル友

人ヨリ左ノ事件ヲ告來レリ今日ハ英國女

王ノ誕生タシ日ナルニ悲カクムヘキ新聞ヲ得タリ

上海名地ニアルオーストリア名地ノ殖民シヨクドモ

彼國ノ太子ノ殺害セラレシヲ聞ケリ此太

子曾カッテ国民ノ移往ハツヲ見物ノ為メ恐怖シナ

ガラ上海江來リシ人ナリトツ又アイルラ

ンド名地ノ惡黨共至當ノ刑ヲ受ケシヨシ

今日ドーカラスニテ次ノ新聞ヲ得タリエ
デンボルクニ在ル英國ノ太子ヲセド子ノ
地ノ近辺ナルコロントナルフト云フ所ニテ
殺害セントノ企アリシト

又政府ノ傳信機ニテ次ノ新寫ヲ得タリ尚
委シキ事ハ今晚ニ至テ知ラルベシ右ニ記
セシ英太子コロントナルフト消遙セシ折一
人ノ乞食鳥銃ヲ以テ太子ヲ發射セシニ此
玉背ニ中リ^骨經テ終ニ胃臟ノ外ニ落

着ケリ未夕此玉ヲ抜ク事能ハス病者甚夕
痛ミヲ覺フ然カシ^ハ未死生ヲ存セズ
ト

夕七時半ノ報告ノ趣ニテハ英太子ノ痛ミ
未夕甚夕シトイヘドモ漸治療ノ効アリシ
ト再ヒ第五月十二日^{我四月十八日}附ノ報文ニテ
次ノ事件ヲ聞得タリ英太子ノ腹中ニアリ
シ銃玉格別ノ痛ミナクシテ^ト拔出シ得タリ
後^ト漸快氣シテ再ヒ公務ヲ司ニ至レリト

佛軍艦ドブリークス船將ヨリ告文

先日船將ボルロツク名人淺深ヲ測量セシ後
又大坂川口ノ流勢漸相變シ且堰ニ於テ居
留地ヲ撰ム儀ニ付而ハ彼是議論不穩次第
モ有之依之先達而堰ノ港内ヲ側リシ通り
天保山ヨリ川口之船路ヲ能吟味シ此ヲ大
坂兵庫在留ノ人々江心得サセ候ハガ可然
ト存候在留ノ人々此儀ヲ希望スルニ至ラ
シモノ力爲ノ此一通ヲ大坂兵庫ノ役所ニ

指置ント存候此談事ニ就而ハタトハ仮令一句ノ
余モ無難ニシテ經過スト雖忽チ又危難ヲ
生スルニ至ルヘキチ人々江説得スヘキ事
過日軍鑑トブリークス名船數日天保山ニ碇
泊セシニ數多ノ日本船ノ此辺ニテ難ニ逢
シチ見タリ其時人民ノ溺レシチ知レリ
今日正九ツ時米同軍鑑才ナイダ名船中帆柱
ニゼオルジ名人ノ旗ヲ揚テ凡四分時ノアノイ
ダ大砲廿一發シテ英國女王ノ誕生日祝セ

リ英ノコンシユル館ハ勿論米國コンシユ
ル館其ノ居留地方ニ且港中碇泊ノ船ホモ
尽ク祝旗ヲ揚タリ英國ノ政ヲ執ル人々ハ
今日女王誕生日ニ就テ益國威ヲ輝ンコト
ヲ欲ルナルベシ

今朝英國軍艦セルペント名船著シ第三月十
三日附ノ本國ヨリノ書翰且本月十一日附
ノ横濱ヨリノ書翰ヲ持來レリ
横濱ヨリノ新軍ハ江戸ニ於テ強勢ナル會

津取沙汰ノ外他事トシトソ

先日或人ヨリ書面ヲ以テ小舟競來ノ儀ヲ

企シト雖ライフル競發ノ儀ヲ一紗同意セ

リ當地ノ穩カナラサルニ就而ハ我々一同

常ニ砲器ヲ所持スルヲ肝要ト存ス併其術

ヲ知ラサレハ忽不用ニ歸スベシ其修業方

ニ就而ハ夕刻京暇ノ時ヲ得テ議ニナハ暫

ニシテ得ラルベシ然ル上ハ大ナル快樂ノ

一器トモナルベシ

ニ
コ

當地水害甚シクシテ大雨ノ爲ニ墓地分近傍ノ砂土ヲ流シ込カ故ニ政府ニ於テ木石ノ類ヲ以テ壇ヲ築キ居留地東方ニ在川ヲ堰セントノ企アル由ヲ或人ヨリ寫テリ此儀ハ甚夕大切ノ事ニシテ速ニ是ヲ取行ンコトヲ願フ所ナリ若シ猶豫シテ雨降りノ時ニ至ラハ暴雨ノ爲ニ墓地ヲアバカレ近頃葬リシ死骸ヲ衆人ニ暴スニ至ランカト甚夕心痛セ

昨廿二日夕五字半頃ヨリキヤリク瀝氣球ヲ揚ケ夕リ當地ノ人々甚夕是ヲ驚キ感セリ然ルニ惜イカナ夜迄持チ堪ヘザリシヲ

入港物

此頃次第減セリ來ル九十月頃迄ハ格別盛ニ成ル間ジク毛織物類ナリ縮緬類等ヲ好ム大ニ減セリト云ベシ併シ可ナリニ賣レル物ハ黒サワイ。毛織ヘンシイ。トルコ赤木綿并木綿糸ナリ此木綿糸ハ好ム人モ有リ又價

毛上レリ嵐色木綿ハ此頃日本人ノ向ニハ
悪シクレトモ外國人ハ米田飛脚船コスタ
リカノ風軍ニテ三ドル余ノ價ニテ買入シ

出港物相違

生糸 百斤ニ付價

奥州中品 四百三十兩ヨリ四百四十兩迄

同 上品 五百兩ヨリ五百廿兩迄

飯田上品 六百兩ヨリ六百十兩迄

越前 五百兩ヨリ五百廿兩迄

第五月廿三日

我壬月 朔日 追ニ出港セシ高凡

二百箇斗

茶

横濱ニテ買込タル共上中下三等併セ凡四
万斤斗次第時候切迫セシ故外國人古茶ヲ
困マントスルノ趣アリ

新茶ハ先ツ第六月中旬トノ見込也

百斤ニ付價

並茶 拾兩ヨリ拾兩二步迄

中茶 拾七兩ヨリ拾七兩二步迄

上茶 世二兩ヨリ世三兩迄

右下茶ハ當時大ニ直下リセリ新茶ノ極下

茶ハ當時賣物ニ有卜雖價高ケレハ未買入

人ナシ

生蠟

百斤ニ付十二兩一步ヨリ十二兩三步迄ノ

價ニテ凡ニ万斤斗買込夕リ當時未夕買入

サレ僅ノ生蠟アリ

冥東上ニ此手残 先月十四日

此外ニ、賊徒押領シ宇都宮城攻撃のた免壬

生城より朝六ツ半時六番隊并大砲三挺白砲

短カキ二挺大山弥助指引にて且怪ク隊右江

指添發軍引續き大垣藩一中隊大砲一挺兩

藩都合二百人にて進軍致以所四ツ時分宇

都宮城邊はて押浩^{ヨシツ}る迄^ト主^ト賊兵防禦之^ト手^ト迄

左^ト城下町江陸臺塲築立大砲一門並小銃

隊にて防戦致以得共間亦之攻落シ城際生

て押寄せ八ツ時頃内外に砲戦嚴之乎負死
人別紙に通りには此の如く敵方に千五
百人余も有之不容易搦換然るに昼に過に
至り兵裏道より操出し最初棄落せし墓
場江乗入り壬生より返り路を絶別して
苦戦一同相働以右に通り城兵後をやり切
り以分隊位宛差出し戦争いとし以は
弾薬兵糧少にお成り且運送し路を絶
しては不お叶ひ故一端線引いたし兩藩共

引揚げ町口を墓場城兵相固る居以を散々
打破りお偽居以折柄五番小隊は長州一中
隊大垣も同断にて本街道より着陣即列押
寄せ發砲お始む然所因州藩一中隊にて壬
生城より救援として是陳返路相開き夫よ
り一同押詰る終に七時半時分落城大勝利
にお成賊徒去取百人余を肩二百人余にお
見へ以得共未取り調出来並以討逐々申越
し趣にては右につきお残死人数は

發^{パツ}ホも是城以御國許江^ニ指出儀何分^ニ
計^ニ下^ニ交^テ我死^シ之墓所^ニ義^ニ之当^ル城下^ニ
報恩寺^ニ中^ニ寺へ取り^キ之^ヲ先^ニ置^キ以^テ右荒^ニ申
上^レ以^テ以上

薩品五番隊

戦死 上田友輔

川崎兵十郎

河野伴兵衛

六番隊

手負 关代藤之丞

大迫新八郎

戦死 川比六左衛門

永山覚太郎

加納次左衛門

築地宗二郎

松井左兵衛

鷓木吉二郎

同隊手負

野津七次

上原八郎

戦死 岩城平右衛門

西田要之丞

伊地知助五郎

岩切彦二郎

佐藤彦五郎

掬^ク示^シ能^ク右衛門

菱刈七之助

有川陽之助

横山勇藏

脇元喜之助

市成彦右衛門

山下喜之助

伊集院小藤三

同隊深手

廻源五左衛門

鎌田喜之助

松元清右衛門

安田仲右衛門

伊藤正二郎

宇宿茂之丞

日高郷右衛門

矢野八二郎

川上茂八郎

且輕隊

戰死 井上伊右衛門

戰死 内藤金二

手負 宇都 岩太郎

本宮手負

鳥津式部

有馬藤太

種子田左門

外僕一人

右町々宇都宮報知如此以坐以

四月廿八日關東より手紙之写

前略江戸夫ハ賊徒鎮撫ニ相成候得共官軍
着前ニ逃去リ候徳會之賊徒并ニ新撰組ト
唱ヘ候浪士江戸ヲ脱走シテ野州宇都宮并
ニ結城壬生近國所々ヲ押領致居ルニ付宇
都宮應援トシテ茂根藩差越候処初メ流山
ト申所ニ浪士都合二百人余伏勢有之候ニ
依テ及戦候所賊徒近藤勇致降伏器械等モ
取揚ケ勝ニ乘テ宇都宮マテ押寄セ居候処
賊徒ヨリ狭歩ニ出逢ヒ大ニ敗走致味方死

人数多有之候然ル所因州土州應援トシテ
向イ候所壬生ニテ賊ト相戦イシニ是モ同
ク狭歩ニ逢ヒ敗走ニテ彈藥等モ賊手ニ取
ラレ死人モ数多御座候時ニ長州藩一小隊
大垣藩二十人余薩州五番小队共一ツト成
應援トシテ出陣ス去ル日下総ノ内岩井
村ト申処ニテ賊兵七百人余ト出合相戦候
処官軍亦勝歩取首三十余級大砲三挺小銃
數多騎馬三足右分取ニ流産以然ル処去ル

廿三日岩井村之殘徒五百人余千住ト申宿
マテ押寄セハ付佐戸原一小隊薩州一小
隊早速繰出シテ所降伏之ノ心ニテ敵セザ
ルガ故ニ應接ニ及ハル処弥降伏イタシ候ニ
付所持ノ大小砲數多騎馬三足鎗四十本斗
り取上ケ右ノ内二百人余ハ佐戸原預リニ
相成外三百人余ハ備前藩関係ニ相成申以
薩藩六番一小隊大垣藩一小隊又々宇都宮
江押寄ル

右戦ノ次第ハ江以來ヨリ今日迄ノ所置荒
々所報知如此御座ル以上

月日

中村某

右月人ヨリ或友人ノ方江贈リシ書状ノ
写ナリ近頃妄説流行ニ付此實正ノ手紙
ヲ以テ衆人ノ疑惑ヲ晴サシ爲メナリ他
日諸君實正ノ事ヲ得玉ハダ速カニ知新
館ニ御報知ヲ希フ直チニ彫刻シテ萬民
安堵ノ一助トセン

先ニ度根軍門江降伏セシ板倉父子ヲ下野
宇都宮城中ニ於テ斬首セシトノ風評也
過日秋田侯ヨリ羽州庄内江使者ヲ指向ケ
討會ノ論ヲ立テシニ庄内ニ於ハ會ヲ討ツ
ヘキユヘンナシト答フ依テ當時秋田侯ニ
千三百人余ノ兵ヲ以テ庄内入口鳥海山ト
云処道押詰ノラレシ夫レニヨツテ羽州龜
田岩城左京太夫殿日本庄六郷兵庫頭殿共
其勢合セラ三千人斗出張ストノ風評

大坂ノ新聞

○本月十七日薩島鳳瑞丸ト云フ軍船ニテ大
監察使トシテ三條大納言殿副トシテ萬里
小路辨殿東下セラレシ陪從ニハ西御吉之
助林玖十郎小笠原唯ハ江藤新平等十リ守
衛トシテ阿州之兵二百人斗御供ナリト云
○日幕府ヨリ亞国江注文ニナリシ欽船ハ已
ニ先頃横濱ニ着シタルヨシ今度三條殿御
下向ノ上右船御取入レニ成筈ノヨシ

○大坂鎮臺醍醐大納言殿兵庫江御下向アリ
 シ乃千岩下佐次右衛門陪從セント云フ
 ○今度大坂運上処ニテ大坂ト横濱トノ間ヲ
 通行スル飛脚船ト浪花丸ヲ取立テレタリ乘
 組人ハ多分英人之由ニ取締トシテ薩藩肥
 後七左工門ト云人乗組ヲ命ゼラレ來廿五
 六日ニハ兵糧米千石余モ積テ江戸江下ル
 由便船トシテ外國事務判事大隈八太郎并
 海軍先鋒參謀島團右工門トカ云人モ東下

スト云フコトナリ

右ノ飛脚船、便船ヲ願フカ又ハ荷物ノ
 運送ヲ願フ人有ラバ川口運上所カ或ハ
 内平野所松屋町江戸屋平右工門津屋重右工門内家ノ
 者江申出セトノ事ナリ

告文

由良彌太二

私儀大坂御運上所ノ傍ラニテ借馬屋ヲ始
 以ニ付各々様御用被仰下度ニ馬具儀ハ和
 洋共相備居候間御好ニ應シ可申且馬賣

買子仕候条此段布告仕候以上

知新館告文

此社中ニ於テハ珍事并ニ諸相庭物ホヲ記
スノ本意也又館外ノ人タリ凡切能有事ヲ
衆人ニ示サニカ或ハ書籍ホヲ彫刻セント
欲セラル、片ハ此社中へ御示談アラバ速
カニ發梓可致候者也

以上

慶應四年戊辰五月朔日



內外新聞

第三

第七日目每二出板

知新館

神戸新聞

第五月廿三日
我七月初日

今日ハ英國女王ノ誕生日ナリ本國ニ於テハ諸人如何ナル愉快ヲ盡シテ賀祝スルヤ例年期日ニハ上下一統兒童ノ如ク滑稽ケテ之ヲ賀セリ又夕景ニ至レハ老幼ノ別ナク郊外へ出テ快樂ヲ極ムルベシト彼是想像セリ
第千八百廿七年女王即位ノ後ハ餘ク民ノ心ヲ取り盡ク國政ニ心ヲ用ヒラレタリ或日女王自ラセキセコボルク及ヒゴサ地ノ太子アルベルト名ヲ智トシテ以テ婚姻セント企テ布告セシキ國人太夕安堵ノ思ヒヲナシ大ニ是ヲ觀ベリ此誓ヲ結ヒシ後ハアルベルトノ盛名漸々四方へ雷鳴セリ

公自ラ諸術ニ達セルカ故ニ是ヲ國民ニ教示スルノ權ヲ取
レリ又窮民ヲ惠マント欲シ第千八百五十年ニ自ラ費用
ヲ調シテ府中ニ在ル貧民救テ任マシムルノ大室ヲ營メ
リ又千八百五十一年ノ博覧會ハ公ノ企ニ出タリ又千八百六
十二年ノ再度ノ博覧會ニハ公大ニ利益ヲ得タリ
女王ノ日記ヲ閱スルニ誓ヲ結ヒシ後ハ總テ幸福多カリシト
公在世中敢テ政事ノ一派ニモ係ラスト虽モ常ニ政府ニ
就テ女王ト國事ヲ謀レリ嗚呼公ノ死スル實ニ國家ノ為
メ惜ムヘキノ機ニシテ女王ニ於テモ大ナル不幸ニシテ愁
傷亦云ヘカラス後女王薨々トシテ不豫故ニ種々ノ流言

巷中ニ偏子シ然トイヘトモ近來ノ報告ニテ之ヲ見ルニ漸
ニ女王快氣シ客殿ニ出テ客ヲ延見スルノ由ヲ知り大ニ歡
喜ノ思ヲナス是ニ基キテ萬更前日ニ復スルヲ願フ如
ナリ

爰ニ於テ女王ノ功德ヲ贊美スルニ公ヲ以テ是ヲ賞セハ能ク
國王ノ任ニ當レリ又私ニ是ヲ賞セハ貞節ノ婦人ト云ベシ
故賀アルベルトノ後嗣ハ當年廿七才ナリ此公モ亦
父如ク才能ヲ以テ天下ニ有名ナラントヲ願フ如ナリ此公
第千八百六十三年ニデ子ニルカ國王ノ女アレキサンドラヲ
娶レリ此女モ亦容兒美ニシテ生レ付秀才ナリ女王死去

ノ後ハ後嗣トナル可キノ賢女ナリト
方今太子アルフレットハガラテート云舩ニテ日本并ニ支那
ヘノ旅中ナル可シ余等當港ニテ太子ニ遭遇ス可キヲ恐
ル
當時全權公使ハルリーパークスハ海軍副總督ヘニリーケツ
ペルハ大坂ニ在留ナリ此時ニ當リテ軍艦ニトク尽ク當港ニ在
ラス女王ノ誕生日ニ當リテ責ノテ一隻ノ舩アラハト思
フ併只女王ノ國民ニ慈悲アル難有ヲ想像スルナリ

神戸新聞

西洋第六月十日
我四月十九日

昨夕我四月十九日藝州族小舟ニ乗リ外二艘ノ小舟
疑フ疑フラクハ城ト共ニ大坂ヨリ来リ居留地ヲ距ルハタルニ
小大名ナラン
五十間ノ処ニシテ行列ヲ整ヘ米國コンシユル館ニデ
来レリ

先日中野シク當港所々ノ揚場へ運ヒ来レリ是ハ
定メニボントヲ造營スルノ用ナルベシ

大坂ヨリ出帆シタル多クノ軍艦ハ未タ北方ヨリ飯

サリキ鮮日洋人ヨリ官軍ヲ南方ト
唱賊軍ヲ北方ト唱フ以下同之

先日疾ヲ受ケシフライナル者ハ次第ニ快氣ノ由ニ

併シ未タ傷ミハ強ク寒熱アルトナリ痲ヲ付シ日本
人ハ今ニ行衛知レズト雖モ捕人ノ者頻リニ探索ス
ル赴ニテ犯人ノ母ト妻ハ既ニ囚レト成レリ犯人ノ母ト妻ハ既ニ囚レト成レリ
横濱ヨリ左ノ新聞ヲ得タリ

江戸城ハ再ヒ北方ノ手ニ入リシト且又横濱新聞ニ
委シク記シタリシ先般東下アリシ勅使某モ既ニ害
セラル由又遠カラズシテ京都近傍ニ於テ再ヒ戦事起
ルベシ會兵ノ漸々ニ近ツクニ依テ豫メ備ヘヲセル趣
ニテハ斯クアラシクヲ信用セリ

ス子ラー船ナル小軍艦ハ第六月八日我岡四月十七日大坂

ヨリ来リ昨夕出帆セリ

本月六日ノ後ハ價ヲ知ルベキ報告ヲ得ズ入港ノ品
物ハ價高キカ故ニ日本ノ商人嫌フテ買ハズ又出港
モノハ生糸ト茶ノミ尚ヒアリ

或報告ニ依テ次ノ事件ヲ聞得タリ

過日英太子アルフレット名ヲ殺害セント謀リシオ
ーレル名ハ既ニ死刑ニ處セラレシト

アビツシニ一國ノ征伐モ既ニ終リ當時英兵凱陣
途上ナリ然ルニ生捕千余ヲ引卒スルニ就キ
寢動ヲ生セシ欲未タ帰國セズ

或ル報告ヨリ尤ノ事件ヲ拔萃セリ

龍動地名第四月十五日バロック人名ノ諾ノ趣ニテハアビ

シニ一國王ワボク和義ヲ乞ヒシトモ又再ヒ復讐ノ兵ヲ起

ストノ信シガタキ風説アリ

第四月廿日ウオルス國名ノ英太子アルフレット夫婦共

ニドフリン地名ニ到着アリシト

此前日太子ナイト館名ノ官ニ任セシト

第四月廿二日英國トオーストリヤト通商ノ條約ヲ

取替セリヘニン人二人捕ヘラレシト是疑フラクハボ

キニハム地名ノ宮室ヲ燒ントノ企ニ依テナルベシ

神戸病院

第一卷ニ記セリ如ク病院の事ハ已ニ趣旨を立られ
たり乃ち左の如し

病院購金録

神戸 外國事務役所 判

病院ハ人命を保助し人種を蕃培し貧民の病を医業
と得ざる者と救助を道おれハ國家ニ欠べりしむる
要務なり今茲ニ神戸ニ於テ官許を請け一院を設け
貴賤の區別なく有病の者ハ来て治療を得しめ貧
民ニハ医業を施し聊救助の一端とせんと欲す我

と志と同等者不
管多少納金
つゝ人々と希
望
と志と同等者なり

病院御用掛

辰四月

森 龍玄

遠藤 謹助

前書に通りあるは若し有志の人ありは神戸運上所を
或ハ大坂北江戸堀一丁目會所神戸外國事務掛出張
所陸奥湯之助方と持参々有との事なり

醍醐大納言殿有馬へ御出途之事

神戸警衛柳川侯の跡津山侯より警固なり

四月六日関東風聞

一徳川氏慶四月十日水戸へ發途の由りて供方左之通

梅澤弥三郎

遊 撃 隊

精 銳 隊

此度被 仰渡候箇條の内城内住居の家臣廓外へ出
るゝに 御沙汰ニ付此度参謀へ御聞合相成候如
全く曲輪中而已りて半藏御門より 櫻田馬場先和
田倉内平川御門を去るづき度なり 其余御構ひ
無之由

一 静寛院宮様天障院様へ増上寺へ御開きの支となり
其余婦人方も右ふ準し申しきとの支なり
一 軍器引渡の支の目録と以て督府へ御渡しよ相成し
品々其供成り有る由

一 北陸道より進みし官軍の四月二日浅草東本願寺へ
操込成りし如寺内手控にて滞留ありし同
六日同如西福寺へ引移り成りし趣なり

但し本願寺本陣の惣勢千二百人余と云

一 肥前の兵隊の糧米塩味噌十分の由なり

一 肥後の兵隊の四月三日白銀の郎へ着し惣勢凡五百

人程あり内三分の一ハ甲州路へ發行の趣且つ役々の
名前記を

惣督 清水教馬 目附 財津源之丞

勘定奉行 浅井新九郎

勘定方頭取 才士弥一郎

勘定方 水谷才助 物書 大森吉之助

一 藤堂家人数五百人余なり虎記を

惣師 藤堂仁右衛門 副師 藤堂隼人

謀師 藤堂監物 番頭者頭百廿人

司令炮手 三十九人 乗馬 七足

兵糧者頭 三百八十人 砲馬 四疋

四月三日肥後勢八百人計リ千住へ着内四百人計
ハ士分リて器械本込銃兵より兵勢壯人なり
と云其外藝州二百人若州四百人と聞也

水戸より奥州若松迄先觸馬

人足二百二十人 馬九疋

右ハ水戸殿家来市川三九衛門佐藤因書朝比奈弥
太郎等年来奸惡ノ所業有之今般依 朝命嚴罰
可申付候如多人数引連奥州會津筋へ脱走 赴相
聞候ニ付右為追捕水戸殿人数千二百人余罷越候

糸前書人馬無遲滞差出可申候以上

月日

水戸殿 目附方

常州徳田より

奥州若松迄驛々問屋中

一水戸家々来鈴木石見の儀ハ江戸市中より酒賣
成りて居しと官軍へ召捕より千住と云所にて
獄門ニ仰付らる也

羽州の風聞

一當時秋田候の領分より庄内征討のより津輕南部仙
臺米澤其外亀田本庄等の藩元九家の兵隊屯

集せりと聞ゆ

一 仙臺并薩長の兵船ハ庄内の沖ニ碇泊せりと云々
是とも此より未と詳あり

一 四月廿五日秋田の軍勢庄内を征せんと最上川の岸
ヲ兵隊を進む庄内よりも之を拒ぐんとあり謀師
松平権十郎ニ命じて同様に川岸へ出張して空
く對陣せり秋田の謀師淡江内膳急に一計を廻りし
樹木ニ旗を縛り関の声を發後軍の大勢加りた
る如く見せ勢となし日暮を待つ庄内勢
ハ頗る小兵を増し川端を守る支先キは倍を淡江

内膳敵の動靜と察し其後を襲ひ一舉にして庄
内を取らん兵隊を分り閑道と面を峻難をわたり
て進み加路程遠く且峻をわが故は行軍意を任
せり半途より曉に至り故庄内の陣にも其謀
畧と知る兵を割きこれを迎ふんとせり此より淡江
ハ軍策圖を外せりと此策内膳が計なり如く行は
ぬを以て庄内を取らば掌を及ぶの易きありと
遺憾の至りなりと聞ゆ

一 庄内の領地六万石計りの地ハ既ニ縮めしりと云々
又同領酒田と云々地ハ商人婦人等々何方へ行しや

一人も居らざると云つ

奥羽の戦争巷説區々々々々々人心騷擾ともの
とも此新聞ハ秋田より告来る所ニ他日其後の報を
聞得ずる随々見てもさう浮説盲談ニ惑の旗幟
恤々爰々贅を

北越の風聞

閏四月十一日薩州長州加州の監軍越後高田に至り
不審の事件を詰問及及び如陳謝粗相立いと云
先達て高田より出置置る細作賊市川黨の爲生
捕られ信州越中辺の事を賊より尋ね故官軍追

々軍と纏めんと答へて去らる其際小高田城を乗
取とて賊軍支度の騷々々々紛と彼の細作縛成
適と高田又歸ると敵の情態と報告と高田藩を
此注進と得る米山峠の要害賊を取られ取返と
難と軍議と決り同日夕を限る小兵隊と操出を
薩長両藩の兵も越中岩海浦より乗船して越後今
町に上陸し米山峠へ應援の手筈をとりとて
新瀉と賊を取らとて難義をとりと薩長肥前等の
軍鑑同所へ進發とすべきの令ありと由あり

因ニ日今町ハ高田城の北辺に在りて越中富山より

船路卅里と云又米山峠ハ越後頸城郡刈羽郡の境ニ
し高田の東北長岡興板への半途よりて柏寄の
南方ニ當ると云々

櫻雲主人曰近來外國人ヨリ種々ノ珍説新聞
ヲ神戸長寄横濱函館ノ間ニ傳觸スルハ畢竟臨
時ニ罟械貨物ヲ賣沽シテ此舉ニ乘シ大利ヲ
射ランコトヲ喝希シテ然ルナリ右ノ件々ノ説モ
信ズルニ足ラズト雖モ今茲ニ出セルハ尚此上ニモ妄
説狂言ヲ諸方ヨリ拾ヒ集メ取捨斟酌シテ讀者
ノ為メニ知見ヲ開カント欲ス識者幸ニ了解セヨ



